

青山学院大学 経済研究所 2021年度短期プロジェクト
「多人種・多民族社会（米国）とジェンダー」ワークショップ

河原崎やす子氏ご講演

アジア系アメリカ文学研究の潮流 —個人的関心の推移を含めて—

青山学院大学経済研究所による2021年度短期プロジェクトでは、「多人種・多民族社会（米国）とジェンダー」（研究代表 金田由紀子）をテーマにしたワークショップを開催いたします。岐阜聖徳学園大学教授の河原崎やす子氏を講師に招き、同氏がこれまで研究を続けてこられたアジア系アメリカ文学の潮流をたどりながら、移民史・ジェンダー論・世界文学等の観点などから、ご講演をしていただきます。研究者のためのワークショップですが、学生や卒業生等の参加も歓迎いたします。

題目 アジア系アメリカ文学研究の潮流 —個人的関心の推移を含めて—

講演者 河原崎やす子氏

略歴：上智大学文学部英文学科卒業。UCLA大学院アジア系アメリカ研究専攻修士課程修了（Master of Arts in Asian American Studies）。

現在、岐阜聖徳学園大学教授。

専門分野：アジア系アメリカ文学と文化、ジェンダー論

日時 2022年1月29日（土）14:00～15:30

定員 先着60名

参加方法 オンライン（Cisco Webex を利用）

申込方法 参加希望の方は、2022年1月25日（月）までに、
21.aogaku.project@gmail.com 宛に以下の内容を明記の上
メールをお送りください。受付締切後、実施日3日前までに
いただいたメールに会議リンクを発行いたします。

*事前にCisco Webexのダウンロードをお勧めいたします（無料）。

*3日前までに会議リンクを受信できていない場合には、
金田由紀子のメール（21.aogaku.project@gmail.com）にご連絡ください。

[申込メール記載事項]

件名：青山学院大学 経済研究所 ワークショップ申込

本文：氏名/ご所属 を記載ください。

*ご所属のない方は、講演者 河原崎氏または主催者 金田とのご関係を記載ください。

*氏名の記載がない場合は、申込を受理できませんのでご注意ください。

*当日は参加画面にお名前を出していただきます。

連絡先 研究代表 金田由紀子 E-mail：21.aogaku.project@gmail.com

題目：アジア系アメリカ文学研究の潮流 –個人的関心の推移を含めて–
河原崎やす子

概要：

本発表はまずアジア系アメリカ文学の概要とその流れを示し、後半にそれに連動する発表者の関心の推移を述べる予定である。アジア系アメリカ文学ジャンルに必須なのは移民史理解である。1965年の移民法改正はきわめて重要な転換点であり、それ以前は中国系、日系が多数を占めたアジア系移民の構成が大きく変容し多様化した。1968年からのアジア系アメリカ人運動はこの雑多な移民をまとめるのに寄与し、アジア系アメリカ人という観念と言葉はここから捻出された。この移民構成の変容にはdiversityとheterogeneityという表現が最適である。この変化を背景に、1980年代からアジア系アメリカ文学は一気に花開いた。Maxine Hong Kingston、Amy Tan、David Henry Hwangなどの代表的作家が次々に作品を発表し、90年代にはHa JinやJhumpa Lahiriなどの移民世代作家の全米図書賞やピューリッツァ賞受賞が話題となった。今日ではジャンルの的にも広がりを見せ、70年代に「片手で持てるくらい」の作品しかなかったアジア系文学は今では質量ともに充実し確固たる地位を築いている。

アジア系アメリカ文学のテーマはアメリカにおける人種差別や偏見、故国からの移動や越境などをジェンダーやセクシュアリティに絡めたものが多く、批評のパラダイムとしてglobalization, transnational, diaspora, postcolonialなどが適切だと考えられてきた。ところが近年、globalizationは欧米中心の思考だとして、アジア系にはそれを越える惑星思考や世界文学という概念が必要だとする見解が出現した。これこそJinやLahiriなどの一つの国に所属せずに領域横断的に創作活動をする作家にふさわしい枠組みである。こうした活動を展開する作家も増えた今、アジア系をトランスボーダー文学と位置づける試みもされるなどアジア系アメリカ文学に新しい潮流が生じているのは間違いない。

本発表者の研究もこの新潮流を踏まえている。当初は自らと関わる日系文学とジェンダーという点にこだわったが、ジェンダー観点からフィリピン系文学ことに作家Jessica Hagedornに関心が移行した。その後フィリピン系文学にみられる複雑なポストコロニアル状況と太平洋戦争における日本植民地支配の問題に着眼した。日本植民地主義批判を含めた作品が非常に多いのはなぜかという疑問からである。そして研究対象がフィリピンから東・東南アジアや南太平洋など旧日本植民地からの移民文学に広がるにつれて、この文学群はアジア系文学という枠組みに収まらないと認識し、「世界文学」概念こそ適切だという結論に至った。このジャンルの文学の多くは日本植民を厳しく糾弾するが、戦争を体験しない世代の作家たちが単純な非難ではなく様々な新機軸を見せている。日本の加害の歴史を認識するという意義もあり、今後もこの方向の研究を広く深く進めたいと考えている。

現在のところ、アジア系アメリカ文学はアメリカ文学ジャンルの狭い一領域でしかないが、新たな潮流や急増する移民数を視野に入れると目を離せない分野だといえよう。